

門祖日隆聖人物語 第13回



550

応永三十三年、門祖日隆聖人は久しぶりに故郷の越中(富山県)浅井嶋村に戻ります。その帰り、船で日本海を渡り、敦賀を目指すのですが、嵐のため小さな浜辺にたどり着きます。しかし、そこは大変な村だったので。



門祖聖人の実家、桃井家の家老で、応永二十三年に起こった反乱を鎮めた中村元成さんは、その後、門祖聖人のお弟子になり、日永と名乗られるんだ。

その日永師は、応永三十一年に亡くなるんだけれども、門祖聖人は回向のため二年後の応永三十三年、故郷に戻られて三回忌の法要をお勤めになるんだ。その時に、お父様の桃井尚儀公のご回向もされたんだよ。

その帰り、敦賀の角鹿にある組屋五郎右衛門というご信者を訪ねるために、船で向かわれるところ、悪天候のため色が浜という小さな漁師町の、とある浜辺にたどり着かれるんだ。しかし、そこでは恐ろしいことが起きていたんだね。

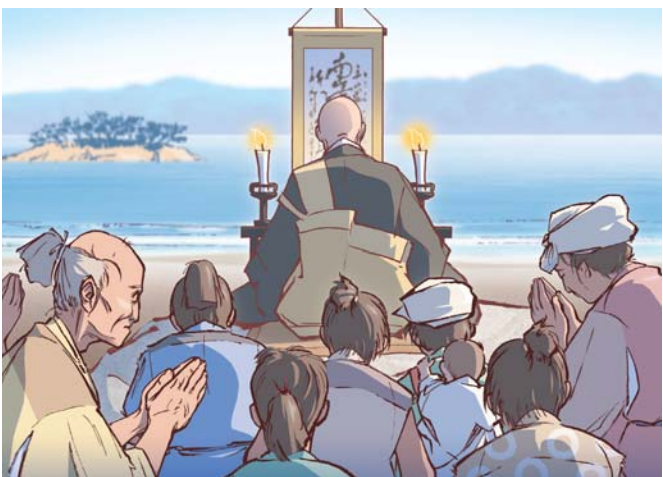
疫病の浜辺の村

なんとか浜辺に上がった門祖聖人たちは、その村が異様な雰囲気包まれているのを感じたんだ。誰かいる感じはするけれど、家の外には誰もいない。浜辺の舟にも、浜に干してある網の側にも、村にある井戸の側にも。

そして、とある家の中を見たら、そこには弱り果てた年老いた女の人がいたんだよ。その女の人は、門祖聖人のお姿を見て、手を合わせて助けて下さいとお願いされたん

だ。

この女の人の話によると、この色が浜という村では、疫病(はやりやまい、伝染病)が流行って次々と村人が倒れ、とうとう全部の家の人が病気になったんだと。



浜辺でご祈願をされる門祖聖人と村人たち

村人を治して一村教化

門祖聖人は、直ぐに他の宗派の本尊を払い、火で燃やして浄め、御本尊を奉安されて御題目で病気が早く治るようご祈願されたんだ。

すると、この家の家族全員がたちまち病気が治り、この女の人はその後十年も寿

命が延びたんだそうだよ。

この話を聞きつけた村人は、我も我もと門祖聖人のもとに、他の宗派の本尊を持ってかけつけ、自分の家でも御本尊を奉安して助けてほしいと集まってきたんだ。

そこで、浜辺にある大きな岩の上で御本尊を奉安し、村人全部でお看経されたんだ。すると、あちらでもこちらでも、次々に元気になる人が出て、とうとう村人全員の病気が良くなったんだ。そして村人全部がご信者になったんだよ。

本隆寺の創建

この色が浜には、古くから金泉庵という禅宗のお寺があったんだけど、そのお寺の住職は、門祖聖人のご信心のすばらしさに感激して、お寺ごとご信心をすることになり、改めて門祖聖人のお弟子となって日実と名乗られるんだ。そしてお寺も本隆寺となったんだよ。

ここには、門祖聖人がご祈願のため座られてお看経をされた岩、「祈祷石」があり、その上に開山堂が建てられているんだ。また、ここは最近まで村人全員がご信者で、本隆寺に朝参りをされていたそうだよ。なんだか、佛立宗の朝参詣みたいだね。病氣平癒のご祈願が息ついた門祖聖人は、予定通り敦賀に向かわれることになるけれども、ここでも大きな事件がおきたんだ。でも、それは次号でね。



ご祈願をされた岩「祈祷石」。今はこの岩の上に開山堂が建てられている。